

「この町と命と静けさと」

— 2 稿 —

2026/09/27

山極 瞭一朗

〈人物表〉

垂木 松良

(18) 高校生

結城 暖

(18) 松良の友人

垂木 蒼地

(42) 松良の父

垂木 松良

(7) 松良の幼少期

1. (回想) だんじり小屋 (昼)

小屋の中に、大きな山車。

法被を着た垂木茸地(42)、ダボツとした法被姿

の息子・垂木松良(7)の頭を撫でて、

茸地 「この町に生まれた人間はな、だんじりに生き、だんじりに死ぬんや」

松良、よくわからずポカンとしている。

茸地 「お前もいつか、てっぺんで舞え」

にこつと笑い、うちわを松良に握らせる。

松良、山車のでっぺんを見上げる。

2. (回想) 岸城城 (きしきじょう) ・外観 (昼)

天守閣をイチヨウの木が囲む。

淡く色づく葉。

どこからともなく太鼓や鉦(かね)、篠笛(しのぶえ)が混ざり合った一定のリズムを刻んだ音(以下、「だんじりの音」と表記する)が聞こえる。

3. (回想) 大通り (昼)

大勢の男たちが、「そーりゃーおーりゃ」と声を上げながら、山車を曳いている。

けたたましく鳴り響くだんじりの音。

沿道には多数の出店と観客。

男たちは走り出す。山車は急加速。

山車のでっぺんには茸地、うちわ両手に舞う。

山車は急カーブを曲がり切る。

大歓声。

その観客の中に、松良の姿。彼ひとりだけ笑っていない。

4. 葬儀場・外観 (夕)

煙突から煙。

5. 葬儀場・火葬場（夕）

火葬炉の中、燃え上がる炎。

悲しみを隠すことなく泣きわめく人や、法被やうちわなどを握りしめ沈痛な面持ちの人など。

その中心に高校生の松良（18）、じっと炎を睨んでいる。

隅にいる制服姿の結城暖（18）、松良を見る。

松良、逃げるように立ち去る。

6. 葬儀場・休憩室（夕）

松良、ドカッとベンチに腰を下ろす。ため息をつく。

結城、追いかけるように入ってきて、

結城 「親族お前だけやぞ。最後までおらんでどうすんねん」

松良、結城を一瞥（いちべつ）し、

松良 「親父だって、いてほしいと思ってない」

結城 「アホか」

松良、ふっと乾いた笑みをこぼす。

結城、舌打ち。自販機の前に立ち、乱雑に金をいれる。ドリンクを選ぶ。

松良 「英雄になった」

結城 「あ？」

松良 「昔親父に言われたことがある。この町に生まれた人間は、だんじりから逃れられない」

結城 「今更やな」

松良 「今更……」

結城 「それが宿命やろ」

ジュースを選択。

ドンと、ドリンクが落ちる。

松良 「祭り、今年も予定通り行われる」

結城 「そりやそうや、親父さんかて望んでる」

松良 「親父は死んだ」

結城 「せやから、俺たちで弔うんや」

松良、ため息をつき、

松良 「お前はそっち側の人間なんだな」

結城 「そつちとかこつちとか何やねん。俺らは——」

松良、遮り、

松良 「おかしいとか思わないのか？」

ふっと嘲笑気味に笑みをこぼす。そして出ていこうとするが……

結城 「お前は——」

松良、ピタッと立ち止まる。

結城 「親父さんの何を知ってる？」

と、松良にドリンクを握らせ、

結城 「いつも飲んだたやつや。……祭りの日、待ってる」

ポンポンと松良の肩を叩き、出ていく。

松良、ドリンクをぎゅっと握る。

7. 商店街（昼）

シャッター街の通り。

アーケードに激しい雨が打ち付ける。

松良、歩いている。その虚ろな目。

どこからか、だんじりの音が聞こえる。

松良の頬、ピクッと歪む。

8. だんじり小屋（昼）

小屋の中に、大きな山車。

法被を着た男たちは、太鼓を鳴らし、笛を吹き、練習をしている。

その中に結城の姿。隅でバチを持ち、太鼓を叩く素振りの稽古中。

9. だんじり小屋近くの道（昼）

響くだんじりの音。

松良、傘も差さずにじっとだんじりを見つめている。

10. （回想）だんじり小屋（昼）

外は雪がばらついている。

だんじりの音が響いている。

松良、退屈そうに隅で座っている。

葺地、汗を拭いながら、やって来て、

葺地 「松良、やってみつか？」

と、バチを差し出す。

葺地 「今ならタダでやらしたんで」

松良、首を左右に振る。

葺地 「そこは金取るんかってツッコむところやで」

と、松良の隣に座り、

葺地 「……なんや、やらんのか？」

松良、こつくりと頷く。

葺地 「そうか」

ペン回しのようにバチを回しながら、

葺地 「だんじり、嫌いか」

松良、葺地を見つめる。ポツリと、

松良 「……音、うるさい」

葺地、ガハハと笑って、

葺地 「おもしろいこと言うなあ」

と、松良の頭を雑に撫でて、

葺地 「そんなこと言うとったら、岸城の男にはなられへんで」

楽しそうな葺地。

松良は笑っていない。

11. 垂木家・和室（夕）

白木の位牌と写真立て。法被姿の葺地、腕を組み、カッコつけている。

松良、葺地の写真の前に正座している。
ただじっと、写真を見つめる。

松良 「俺のこと、何も知ろうとしなかったろ」

カッコつけた葺地の写真。

松良、何かを決めたように、サッと立ち上がる。

12. 岸城駅・ホーム（昼）

だんじりの音がけたたましく響いている。
電車が到着。大勢の人が降りる。

13. 商店街（昼）

シャッター街の通りは人で溢れている。

14. 道（昼）

人気がない通り。だんじりの音は響いている。
松良、すたすたと進んでいく。

ただ真っ直ぐに、前だけを見据えている。

15. だんじり小屋（昼）

結城をはじめ、男たちが屯している。

すると、松良がやって来る。

結城、気付いて駆け寄り、

結城 「松良」

松良のもとに男たちが集まる。

結城 「やっぱ来たな」

松良 「……」

結城、法被を松良に差し出す。

松良 「親父にはなりたくない」

結城 「ああ」

松良 「それでも、知りたい」

結城 「知って、それで決めたらええんとちゃうか。お前がこの、

町と、どう折り合いをつけるんか」

松良、法被を受け取る。

結城、松良の肩をポンと叩く。

松良、きゅっと法被を握る。山車を見上げる。

16. 大通り（昼）

歩道には、所狭しと多くの出店が軒を連ねる。
多くの人でごった煮状態。

車道では「そーりゃーおーりゃー」の掛け声とともに、
だんじりがゆっくりと進んでいく。

結城は後方で綱を曳き、大声を出している。
その近くに松良、同じく綱を曳いている。

結城 「松良」

松良 「ん？」

結城 「声出さんかい」

ふっと笑みをこぼす。

そしてだんじりは急加速。

男たちは走り出す。

松良も駆け出して、

松良 「そーりゃーおーりゃー」

（おわり）